

# ロウの形而上学観

伊 佐 敷 隆 弘

## はじめに

20世紀初頭の分析哲学において形而上学は厳しい批判を浴びた。しかし、今日、形而上学は「分析形而上学 (analytic metaphysics)」として復権した<sup>1)</sup>。では、現代の分析形而上学者は自らが取り組んでいる形而上学をどのような営みだと見ているのか。本論文では、代表的な分析形而上学者の一人であるジョナサン・ロウ (Jonathan Lowe, 1950～2014年) を取り上げ、彼の形而上学観を明らかにしたい<sup>2)</sup>。

## I 形而上学の復権

まず、分析哲学における形而上学の復権の歴史を簡単に振り返っておこう。

分析哲学の歴史の初期にあたる20世紀前半において、形而上学は論理実証主義者と日常言語学派から激しい批判を浴びた。例えば、論理実証主義者カルナップ (Rudolf Carnap, 1891～1970年) によれば、形而上学的命題は、「事実の記述」ではなく、「人生に対する感情や態度の表現」に過ぎない。それゆえ、形而上学者は言わば「音楽の才能のない音楽家」である<sup>3)</sup>。また、論理実証主義者エア (Alfred Jules Ayer, 1910～1989年) は、「(言語の用法に関する規約によって真となる) アプリオリな命題を除けば、有意味なのは、経験的な観察によって検証することが可能な命題だけである」とする原理 (検証原理) に基づき、「形而上学的命題は検証不可能だから、真でも偽でもなく、無意味な擬似命題である」と批判した<sup>4)</sup>。さらに、日常言語学派の哲学者であるライル (Gilbert Ryle, 1900～1976年) も、「形而上学的哲学者はこの上もない重罪人である。彼らの語ることは、よくて系統的に誤解を招く表現であり、最悪の場合は無意味である」と言って、形而上学を批判した<sup>5)</sup>。

しかし、その後、オックスフォード大学のライルの後任であるストローソン (Peter Frederick

---

1) [伊佐敷 2015].

2) 主に [Lowe 1998] [Lowe 2002] [Lowe 2006] に依る。

3) [Carnap 1932].

4) [Ayer 1936].

5) [Ryle 1932].

Strawson, 1919～2006年)は、1959年に『個体：記述的形而上学<sup>6)</sup>』という本を公刊し、形而上学の復権に大きな役割を果たした。ストローソンの言う「記述的形而上学 (descriptive metaphysics)」とは、「我々の概念構造の最も基礎的なカテゴリー」を明らかにしようとする探究である。この本は形而上学に対する分析哲学者たちの拒絶反応を和らげる役割を果たした。また、ストローソンは基礎的カテゴリーとして「物体 (body)」と「人物 (person)」という2つのカテゴリーを提唱したが、それはロウの4カテゴリー論 (対象・モード・種・属性の4カテゴリー) をはじめとする現代の分析形而上学におけるカテゴリー論の先駆をなすものであった<sup>7)</sup>。

にもかかわらず、ロウはストローソンの記述的形而上学に対して批判的である。ロウによれば、ストローソンの仕事は、世界の構造ではなく、人間の概念構造 (conceptual structure) の分析にとどまった。これに対し、ロウの形而上学は「世界そのものの構造」を明らかにする。ストローソンは「記述的形而上学」と「改訂的形而上学 (revisionary metaphysics)」を区別し、後者を否定したが、逆に、ロウは前者を否定し、「改訂的形而上学は可能だ」と主張するのである<sup>8)</sup>。

このように、ストローソンの「形而上学」とロウの「形而上学」の間には距離がある。では、ロウの考える形而上学とはいかなるものなのか。そして、ロウは自分の形而上学観をどのように正当化しているのか。以下の論述において、これらのことを明らかにしていこう。

## II 形而上学とは何か

ロウによると、形而上学の探究対象は「全体としての実在の持っている根本的な構造 (the fundamental structure of reality as a whole)」即ち「実在全体の根本構造」である<sup>9)</sup>。

### 1 形而上学と経験科学の違い

個々の経験科学の探究対象は、実在であるという点では形而上学と同じだが、それらはいくまでも実在の一部にすぎない。例えば、生物学の探究対象は生物現象であり、経済学の探究対象は経済現象であるが、これらの現象は実在の一部を占めているにすぎない。このように、形而上学と経験科学とでは探究対象の広さに違いがある。

しかし、物理学とりわけ宇宙物理学は「実在全体の根本構造」を探究対象にしているのではないか。では、形而上学と物理学はどう違うのか。ロウは両者の違いとして、(1) 形而上学は実験データ・観察データに依拠しない、(2) 形而上学は抽象的存在者も扱う、(3) 形而上学は、因果的説明でなく合

<sup>6)</sup> [Strawson 1959].

<sup>7)</sup> 分析哲学における形而上学の復権には、ストローソンの他にクワインやクリプキも大きな役割を果たした。この点については [伊佐敷 2015] を参照せよ。また、ロウの4カテゴリー論については [Lowe 2006] および [伊佐敷 2012] を参照せよ。

<sup>8)</sup> [Lowe 1998, p. 6, n. 4].

<sup>9)</sup> [Lowe 2002, p. 3].

理的説明を必要とする存在者も扱う、という3点を挙げる<sup>10)</sup>。

即ち、形而上学も物理学と同じく、「時空間内に存在する物の本性」、「時空そのものの本性」、「因果関係の本性」に関心を持つが、その際、実験データや観察データに依拠せずに、それらの本性を論じる。つまり、形而上学的知識はアプリアリな知識である。この点が物理学と異なる。

さらに、形而上学は、物理的世界の本性だけでなく、「数」、「集合」、「命題」などの抽象的存在者 (abstract entity) の本性も探究の対象とする。この点も物理学と異なる。

さらに、形而上学は、「人」、「人の思考や感情」、「社会的集団」、「政治的集団」などの存在者にも関心を持つが、これらの存在者は因果的説明 (causal explanation) だけでなく合理的説明 (rational explanation) をも必要とするがゆえに物理的法則だけでは説明できない。尤も、物理主義 (physicalism) 的な哲学者は、因果的に説明できない存在者の存在を否定し、世界で起こるすべての現象は究極的には物理学で (即ち、因果的に) 説明できると主張する。しかし、ロウに言わせると、そのような論争自体が、物理学ではなく形而上学に属する論争である。(この点については、次の第Ⅱ節第2項「科学主義 (クワイン) への批判」で論じる。)

要するに、ロウによると、形而上学は自律的 (autonomous) であって、他の学問に吸収・還元されないのである。

## 2 科学主義 (クワイン) への批判

哲学者の中には、形而上学の自律性を認めず、形而上学は科学の中に吸収されるべきだと考える者もいる。そのような主張をロウは「科学主義 (scientism)」と呼び、「自然化された認識論 (naturalized epistemology)<sup>11)</sup>」を唱えたクワイン (Willard van Orman Quine, 1908 ~ 2000 年) をその一人だと見る。科学主義に対してロウは次のように批判する<sup>12)</sup>。

自然化された認識論によれば、認識論は心理学の一部であり、心理学は生物学に基礎を持ち、生物学は究極的には物理学に基礎を持つ。この考え方からすれば、自然科学の一部としての形而上学、即ち「自然化された形而上学 (naturalized metaphysics)」だけが存在しうることになるだろう。しかし、「自然化された認識論」という主張自体が実は形而上学的である。したがって、それは自己破壊的 (self-defeating) な主張である。ロウはこのように批判する。本論文第Ⅲ節第1項「カント的形而上学への批判」で後述するロウのカント批判などから推測すると、ロウの言いたいことは次のようなことであろう。

人間も、人間の思考も、実在全体の一部である。科学主義は、「実在全体を科学によって認識しうる」という主張であり、それは、個々の科学自体が扱えるテーマではない。なぜなら、個々の科学はそれぞれ実在全体の一部を固有の探究対象としているからである。それゆえ、科学理論がこの主張を前提にすることはありえても、科学理論がこの主張を正当化することはできない。科学主義は、実在全体に関す

---

<sup>10)</sup> [Lowe 2002, pp. 2-3].

<sup>11)</sup> [Quine 1969].

<sup>12)</sup> [Lowe 1998, pp. 4-5] および [Lowe 2002, pp. 5-7] に依る。

る主張をしている点で、科学に属する主張ではなく、むしろ形而上学に属する主張である。したがって、科学主義の主張はみずからの主張と矛盾している。ロウの言いたいことはこのようなことであろう。

ロウによると、事態は科学主義の主張とは逆であって、あらゆる経験科学は形而上学を前提にしている<sup>13)</sup>。というのは、存在可能なものだけが現実存在するからである。したがって、形而上学は記述的ではなく、むしろ規範的である。科学者たちは彼らの理論を提起するとき、明示的であれ潜在的であれ、形而上学的仮定をせざるを得ない。例えば、形而上学なしでは、「変化を通じた持続」さらには「変化」という概念は不可能である。人間は、「すべての変化は世界という一つの実体の様相の変化なのだ」と主張するスピノザ主義や「すべての変化は新たな実体の出現であり、持続する実体というようなものはない」と主張するヘラクレイトス主義という極端な立場は取らず、或る変化（例えば、水から氷への変化、芋虫から蝶への変化）は「同一実体の様相の変化」（様相的变化 phase change）と捉え、別の変化（例えば、燃焼による紙から灰への変化、放射線崩壊によるウランから鉛への変化）は「異なる実体への変化」（実体的変化 substantial change）と捉えている。そして、どちらの変化であるかの基準は、単なる「物質の塊」の場合と「生物」の場合で異なる。物質の塊の場合、その部分をなす物質が入れ替われば、全体として別の塊になるが、他方、生物の場合、構成する物質が入れ替わっても同一個体のままである。したがって、「物質」や「生物」というカテゴリーが先行しないと、「様相的变化」と「実体的変化」を明確に区別することはできず、ひいては「変化」の概念自体が成立しない<sup>14)</sup>。

要するに、科学主義に対するロウの批判のポイントは2つある。即ち、①科学主義自体が一つの形而上学であるから、それは自己矛盾している、そして、②個々の経験科学は形而上学を前提としている、ということである。

さらに、論理学は経験科学に含まれないが、ロウによると、論理学も形而上学を前提している<sup>15)</sup>。例えば、「ファーディが雌キツネであり、かつ、雌キツネでない、ということは事実でない」という文 A は経験に訴えることなく、論理法則（矛盾律）からただちに真だと分かる。しかし、「文 A が矛盾律からの論理的帰結だ」という命題 X 自体は、論理法則ではない。論理法則は一般的なものだからである。かといって、命題 X は、何らかの論理法則からの帰結でもない。なぜなら、もしそうなら、「命題 X が論理法則からの帰結である」というさらなる命題 Y が、別の論理法則からの帰結なのか、という問いが生じ、以下、無限に同様の問いが生じてしまうからである。ロウによると命題 X が表現しているのは、「論理法則」でも「論理法則からの帰結」でもなく、形而上学的必然性<sup>16)</sup>である。このように、論理学も形而上学を前提しているのである。

13) [Lowe 1998, p. 2].

14) [Lowe 1998, pp. 174-179, 188].

15) [Lowe 1998, pp. 21-22].

16) 「形而上学的必然性」については本論文第IV節第3項で後述する。

### 3 形而上学の不可欠性

ロウによれば、形而上学はあらゆる学問分野の知的背景として不可欠である<sup>17)</sup>。なぜなら、真理は一つ (one) であって分割不可能 (indivisible) だからである。言い直せば、世界全体即ち実在全体は単一 (unitary) であり、それゆえ無矛盾 (self-consistent) だからである。そして、真理の分割不可能性の故に、個別科学がそれぞれ追究している真理は互いに無矛盾でなければならないが、主題が限定されている個別科学は互いの無矛盾性を判定できない。判定できるのは、主題と目的に関して完全な普遍性を求める形而上学だけである。つまり、真理の分割不可能性のゆえに、形而上学は不可欠 (indispensable) なのである。

学問分野の中での形而上学の位置をこのように捉えることに対して批判する論者もいるだろう。しかし、そのような批判それ自体も形而上学の範囲に含まれる。なぜなら、そのように批判する際、実在全体を見渡す必要があるからである。これは、まさに形而上学の営みそのものである。つまり、ロウによると、形而上学批判も形而上学に属するのである。例えば、相対主義 (relativism) は真理の唯一性を否定するかもしれない。文化的相対主義者は場所の違いによる真理の相対性を主張し、歴史的相対主義者は時代の違いによる真理の相対性を主張するかもしれない。しかし、相対主義の主張自体が一つの形而上学的主張である。なぜなら、相対主義の主張は、限定された知的探究即ち個別科学の範囲を超えて実在全体に関するものだからである。

要するに、ロウに言わせると、「人はみな、好むと好まざるとに関わらず、また、気づいていようといまいと、形而上学者」なのであり、科学者自身が形而上学に知らぬ間に取り組んでいることも大いにありうるのである。

### III 実在論的形而上学観

ロウによると、哲学の中心には形而上学があり、形而上学の中心には存在論 (ontology) がある<sup>18)</sup>。そして、存在論の中心にはカテゴリー論 (category theory) がある。ロウの言う「カテゴリー」は、カント<sup>19)</sup> (Immanuel Kant, 1724 ~ 1804 年) におけるような「思考のカテゴリー (categories of thought)」ではなく、アリストテレス<sup>20)</sup> (Aristotelēs, 前 384 ~ 前 322 年) におけるような「存在のカテゴリー (categories of being)」を意味する。即ち、カテゴリー論とは、「どんな存在者のカテゴリーがあり、互いにどのように関連しているのか」という研究である<sup>21)</sup>。

17) この項は [Lowe 2002, pp. 3-4] および [Lowe 2006, pp. 3-4] に依る。

18) この項は [Lowe 1998, p. 2], [Lowe 2002, p. 14], [Lowe 2006, pp. 3-5] に依る。

19) [Kant 1787].

20) [Aristotelēs, *Categoriae*].

21) 例えば、ロウ ([Lowe 2006]) によると、集合は「抽象的対象」というカテゴリーに属しており、その存在は「具体的対象」というカテゴリーに属する存在者に依存している。また、個体と普遍は「個体が普遍を実例化 (instantiate) する」という関係にある。そして、すべてのカテゴリーは究極的には4つの根本的カテゴリー (対象・モード・種・属性) のいずれかに属する。ロウのカテゴリー論については、[Lowe 2006] および [伊佐敷 2012] を参照せよ。

本論文第Ⅱ節「形而上学とは何か」の冒頭で述べたように、ロウによれば、形而上学は「実在全体の根本構造」を探究対象とする。それゆえ、ロウの言う「形而上学」は、カントにおけるような「存在についての我々の思考に関する学 (science of our thought about being)」ではなく、アリストテレスにおけるような「存在に関する学 (science of being)」なのである。

ロウは自分の「形而上学」の定義は「伝統的なもの」だと言う。それは、カント的ではなくアリストテレス的な形而上学だという意味である。ロウによれば、我々の思考は、(カントが考えているような)我々と事物の間に挿入され事物への接近を不可能にするカーテンのようなものではない。「アリストテレスはカントのような誤りを犯していない。私はカントよりアリストテレスに従う」とロウは言う。このように、ロウの形而上学観は実在論 (realism) 的である。

## 1 カント的形而上学への批判

では、ロウはカント的形而上学をどのような根拠にもとづいて批判しているのか。

ロウによると、「形而上学はいかにして可能か」という問いを初めて立てたのは『純粹理性批判』のカントだが、カントは「我々自身の思考の構造は接近可能だが、実在それ自体の構造は接近可能ではない」と考えた。ロウに言わせるとカントのこの考えは間違っている。しかし、それ以上に、もし、実在の構造が接近不可能なら、我々の思考も実在の一部なのだから、思考の構造も接近不可能になるはずだ。というのは、我々の思考それ自体は、我々がその思考について考えることから独立に存在しているからである。もちろん、我々が思考していなければ、我々の思考は存在しないが、それは、「我々が自分の思考について考えていなければ、その思考は存在しない」(思考の対象になった思考だけが存在できる)ということとは別のことだ<sup>22)</sup>。それゆえ、「実在それ自体について知りえない」というカントの主張は「自己破壊的だ」と言ってロウはカントを非難する<sup>23)</sup>。

また、カントの形而上学は「アプリオリで総合的な真理はいかにして可能か」という問いを追究するものであったが、この点についてもロウは批判を加える。即ち、「分析・総合」の区別へのクワインの攻撃<sup>24)</sup>以来、「アプリオリで総合的な真理」の存在は疑わしい。他方、「アプリオリ・アポステリオリ」の区別は今も有効だが、「アプリオリで偶然的な真理」や「アポステリオリで必然的な真理」がありうることを示したクリプキの仕事<sup>25)</sup>以来、カントのように「必然性とアプリオリを結び付け、偶然性とアポステリオリを結びつける」ことは自明視できない。したがって、我々はカントと違った仕方でも「形而上学の可能性」について考えなければならない<sup>26)</sup>。

<sup>22)</sup> しかし、デカルトはこれを認めないだろう。というのは、意識することと存在することが一致するのが、「我思う故に我あり」ということだからである。そして、カントが自らの立場を「経験的実在論」かつ「超越論的観念論」と規定する際、経験即ち現象の存在論的身分は「表象されることと存在することが一致する」ようなものなのではないか。したがって、ロウのカント解釈をそのまま認めるのは困難である。

<sup>23)</sup> [Lowe 2002, pp. 7-9].

<sup>24)</sup> [Quine 1951].

<sup>25)</sup> [Kripke 1972]. なお、クリプキの仕事については [伊佐敷 2012] も参照せよ。

<sup>26)</sup> [Lowe 1998, p. 1].

もちろん、カントの形而上学観を支持する論者からは更に反論があるだろうが、ロウに言わせれば、そのような反論自体が實在の根本構造に関する主張である。というのは、それらの反論は「人間の心」および「人間の思考」という存在者に関する主張だからである。これは先に第Ⅱ節第3項「形而上学の不可欠性」で見たように、ロウが形而上学批判に反論するときの一つのパターンである。即ち、「實在論的形而上学に対する批判自体が、實在全体の根本構造に関する主張なのだ」という反論である。したがって、ロウによれば、カントのように形而上学の探究対象を思考内容に限定しようとする試みは失敗せざるを得ないということになる<sup>27)</sup>。

## 2 記述的形而上学（ストローソン）・意味論的形而上学（ダメット）への批判

カントへの批判は、「記述的形而上学」を提唱したストローソンや、意味論に依拠した形而上学を提唱したダメット（Michael Dummett, 1925～2011年）への批判につながっている。

第Ⅰ節「形而上学の復権」で述べたように、ストローソンの言う「記述的形而上学」は、「我々の概念構造の最も基礎的なカテゴリー」を記述するものであって、實在の構造それ自体を探究対象にするものではない。これに対し、實在論的形而上学が可能だと考えるロウは、ストローソンの「記述的形而上学」という形而上学観を批判する。即ち、「我々がたまたま持っている概念図式を記述するだけで満足するのではなく、必要なら我々の概念を改訂するよう試みるべきだ」と言う。つまり、ストローソンが拒否した「改訂的形而上学」は可能だとロウは考えている<sup>28)</sup>。

また、ロウはダメットの形而上学観<sup>29)</sup>を「意味論主義 (semanticism)」と呼び、それを「意味の理論によって形而上学的問いに答えることができる」という主張だと特徴づける。例えば、「集合論・量子物理学・過去などに関する實在論が正当化されるかどうかは、それらに関する文の真理条件が實在論的に与えられるか否かによって決まる」という主張だとする。ロウに言わせれば、意味論的形而上学はカント的形而上学の現代版である。なぜなら、意味論主義者は「思考の構造と、(思考を表現する)言語の構造は対応している」と考えているからである。したがって、カント的形而上学への批判がそのまま当てはまる<sup>30)</sup>。

さらに、自分が生まれ育った言語共同体の持つ形而上学的先入観を批判することは、そのメンバーにとって可能である。同じ言語共同体に属する多くの哲学者が異なる形而上学を提起してきたのがその実例である。したがって、形而上学は言語的文化的相対性に従属しない。これに対し、意味論主義者は「歴史的・地域的な相対性がないくらい、言語の深層にある構造が問題なのだ」と反論する<sup>31)</sup>であろうが、何が「深層構造」であるかの基準を意味論主義者が提示することはできないだろう。ロウは具体例を挙げ

27) [Lowe 1998, p. 6].

28) [Lowe 1998, p. 6, esp. n. 4].

29) [Dummett 1991, introduction].

30) 意味論主義への批判は [Lowe 1998, pp. 7-8] および [Lowe 2002, pp. 11-13] に依る。

31) これは、ストローソンが「歴史性を持たず、まったく変化しない根本的な概念やカテゴリー」([Strawson 1959, p. 10])を記述的形而上学の探究対象にしたことに対応する。

る。「ジョンは満面の笑みを浮かべた (John is wearing a broad grin.)」という文において「にこにこ笑い (grin)」という対象への量化が生じているが、「ジョンはにっこり笑った (John is grinning broadly.)」とパラフレーズすれば、「にこにこ笑い」という対象への量化は生じない。どちらのパラフレーズも可能であろうから、どちらの文が深層構造を表しているか意味の理論からは決まらない。ロウはこのように批判する。

#### IV 形而上学的可能性と形而上学的必然性

先に第Ⅱ節第1項「形而上学と経験科学の違い」で述べたように、形而上学は実験データや観察データに依拠しない。即ち、形而上学的知識はアプリアリな知識である。しかし、形而上学が「実在全体の根本構造」を探究対象としつつ、その提供する知識が「アプリアリ」であるとはどういうことか。

##### 1 形而上学は可能性を教え、経験は現実性を教える

この問いに対し、ロウは次のように答える。

実在の構造的特徴は、少なくとも可能でなければならない。不可能な特徴に関して、経験は証拠にならない。そして、この「可能である」ということは、経験的証拠によっては確証できない。なぜなら、既に可能であることが独立に示された事態に対してのみ、経験は「当該自体が実際に生じていること」の証拠たりうるからである。形而上学は、実在的存在の可能性 (the possibility of real existence) を示すことに関わる。即ち、「どんなカテゴリーが存在しうるのか」、そして「どんなカテゴリーが共存しうるのか」ということを発見することに関わるのである<sup>32)</sup>。

形而上学は「何が存在しうるか (what there could be)」を教えることはできるが、「何が存在しているか (what there is)」を教えることはできない。それを教えるのは経験である<sup>33)</sup>。例えば、「もし時間が実在するなら、持続する実体が存在しなければならない」という主張は形而上学的主張である。しかし、時間が実在するか否か、実体が実在するか否かは経験が教える<sup>34)</sup>。

##### 2 形而上学的可能性

ロウはこのような可能性を「形而上学的可能性」と呼ぶ。しかし、「形而上学的可能性」とは一体何であろうか。

まず、「経験科学が前提する可能性は論理的可能性 (論理的矛盾が帰結しないこと) だけだ」という議論がある。これに対し、ロウは形而上学的可能性と論理的可能性の違いを次のように述べる。論理は命題の形式的性質や命題間の形式的関係に関わるから、論理的可能性は「命題」の持つ可能性である。

32) [Lowe 2002, pp. 10-11].

33) [Lowe 1998, p. 9].

34) [Lowe 1998, pp. 22-23].

一方、形而上学的可能性は「事態」の持つ可能性、即ち、実在的（real）で事象的（de re）な可能性である。つまり、形而上学で扱われる「対象」「性質」「関係」「個体」「種」「部分」「実体」「存在」「同一性」「例化」「可能性」などの概念は存在（being）とその様態（mode）に関わるから、「論理的」というより「存在論的（ontological）」な概念である<sup>35)</sup>。

しかし、さらに、「可能性とは言語の意味の問題だ」という議論がある。例えば、「独身男が結婚していることが不可能であるのは、『独身男』という語が『結婚していない男』を意味するからだ」という議論である。これに対し、ロウは言語の意味に根拠を持つのではない可能性概念の存在を指摘する。例えば、ロウによれば、「或る独身男が結婚していることは可能だ」と言うこともできる。ロウの言いたいことはどういうことか。おそらく、「或る独身者は現実には結婚していない。しかし、もし1年前にあの女性にプロポーズしていたら彼が今既婚者であることは十分にありうる（可能だ）」という意味での「可能性」をロウはここで考えているのであろう。このような意味での「可能性」は、「独身男」という言葉の意味とは関係がなく、物の本性（ここでは、人間の本性）に根拠を持つ可能性、即ち、実在的な可能性（real possibility）である。それは、物を描写するときに我々が使う言葉の意味に根拠を持つ可能性ではない<sup>36)</sup>。

「形而上学的可能性」の具体例をロウはいくつか挙げている。即ち、形而上学において「曖昧な対象」「変化」「時間」「物の分裂」などの可能性が議論されるとき「可能性」は「形而上学的可能性」であると言う。

「曖昧な対象（vague object）は可能か」という形而上学的問いがある。この問いは、単に「曖昧な対象」という概念が論理的矛盾を含むか否かだけでは答えられない。どんな形而上学的原理やカテゴリーが受容可能であるかによってのみ始めて答えられ得る。例えば、量子論によれば電子の同一性は曖昧だが、ロウのカテゴリー論によれば、「対象」の同一性は明確であるべきだから、「電子は対象ではない」と考えるべきだということになる<sup>37)</sup>。

「変化は可能か」あるいは「時間は可能か」という形而上学的問いは、純粋に経験的でも、純粋に論理的でもない。例えば、アリストテレスはこれらの問いを「実体」というカテゴリーと関連づけて答えようとした<sup>38)</sup>。他方、物理的時間論は時間についての主張であるが、そのような主張ができるためにはそもそも時間が可能であることがまず先行しなければならない。つまり、「時間は可能か」という問いは物理的時間論では解決できない問いであり、そこで問われている可能性は形而上学的可能性である<sup>39)</sup>。

さらに、ロウは形而上学的可能性の例として、「数的に1つである物が分裂して、元の物と質的にまったく同じだが、互いに数的に区別される2つの物になることは可能か」という問いを挙げる。そして、

35) [Lowe 1998, pp. 9-10].

36) [Lowe 2002, pp. 11-12].

37) [Lowe 1998, pp. 11-12].

38) [Aristotelês, *Physica*, bk. 4, ch. 11].

39) [Lowe 1998, p. 12].

ロウは、「このような分裂に論理的矛盾は含まれないが、形而上学的には不可能だ」と答えている。「物 a が分裂して物 b と物 c になること」や、「物 a が分裂して物 a と物 b になること」は可能だが、「物 a が分裂して物 a と物 a になること」は不可能である。なぜなら、(因果律を前提した場合) この分裂を引き起こす原因になる何らかの変化が分裂前だと早すぎ、分裂後だと遅すぎるからである<sup>40)</sup>。「早すぎる」とは、仮に分裂前に2つの物 a が空間的に重なり合って存在しているとしても、原因たるべきその変化は両者にまったく同一の作用を及ぼすはずだから、その結果も同一のはずであって、「位置の違い」という異なる結果は生じえない、という意味であろう。他方、「遅すぎる」とは、分裂後の変化が分裂を引き起こすためには、結果が原因よりも時間的に先行する逆向き因果の可能性を認めなければならなくなる、という意味であろう。

これらが、ロウの考える「形而上学的可能性」の例である。物理的可能性・論理的可能性・認識論的可能性のいずれからも区別される「形而上学的可能性」という概念が形而上学の鍵になる概念だとロウは言う<sup>41)</sup>。

### 3 論理的必然性・概念的必然性・形而上学的必然性

可能性概念が多様であるように、必然性概念も多様である。ロウは「厳密な意味での論理的必然性」、「狭い意味での論理的必然性」、「広い意味での論理的必然性」という3種類の論理的必然性を区別し、最終的に、それらを「論理的必然性」、「概念的必然性」、「形而上学的必然性」として区別する<sup>42)</sup>。

まず、「厳密な意味で論理的に必然 (strictly logically necessary)」とは「論理法則によって真」ということである。例えば、「ファーディが雌キツネであり、かつ、雌キツネでない、ということは事実でない」という文 A は論理法則 (矛盾律) によって真であるから、厳密な意味で論理的に必然である。この必然性だけが、本来、「論理的必然性 (logical necessity)」という名前にふさわしい。

次に、「狭い意味で論理的に必然 (narrowly logically necessary)」とは「論理法則および語の定義によって真」ということである。例えば、「ファーディがヴィクスン (vixen) であり、かつ、雌キツネでない、ということは事実でない」という文 B は矛盾律および「ヴィクスン」という語の意味 (「雌のキツネ」という意味) によって真であるから、狭い意味で論理的に必然である。この意味での必然性は「概念的必然性 (conceptual necessity)」と呼ぶことができる。

最後に、「広い意味で論理的に必然 (broadly logically necessary)」とは「論理的に可能なすべての可能世界において真」ということである。ロウはこの必然性を「形而上学的必然性 (metaphysical necessity)」と呼ぶ。

形而上学的必然性の候補の具体例として、ロウは「水は H<sub>2</sub>O である」「ヘスペラス (金星) はフォスフォラス (金星) である」「神は存在する」「全体が同時に赤く緑であるような物はない」「この痛みは

<sup>40)</sup> [Lowe 1998, p. 13].

<sup>41)</sup> [Lowe 1998, preface, p. v].

<sup>42)</sup> [Lowe 1998, pp. 14-16].

私のだ」などを挙げる。「水は  $H_2O$  である」という自然種「水」に関する事実は、（自然種に関するクリプキの議論<sup>43)</sup>を受け入れるなら、)すべての可能世界において真であるから、形而上学的に必然である。つまり、それは、水の本性に基づく必然性であり、論理法則や「水」という語の定義に基づく必然性ではない。そして、水が  $H_2O$  であることは経験に基づいて知られたから、「水は  $H_2O$  である」という真理は「アポステリオリかつ必然的な真理」だということになる。このように、形而上学的必然性は多くの場合アプリオリには知られないという点で、論理的必然性や概念的必然性と異なっている<sup>44)</sup>。

要するに、形而上学の探究対象は实在全体の根本構造ではあるが、形而上学が明らかにするのはあくまでも形而上学的可能性であり、何が現実であるかを教えるのは経験である。

## V 形而上学の方法と可謬性

しかし、そもそも可能性に関するアプリオリな知識はいかにして可能なのか。この問いに対しロウは次のように答える。「いかにして可能なのか」と問うているこの問い自体が可能性に関する問いである。だから、「可能性に関するアプリオリな知識は不可能だ」という主張は自己破壊的である。とすれば、我々は、合理的存在者として、「可能性の領域について何らかの知識を持ちうる」と考えざるをえない。そもそも「合理的存在者」とは推論の妥当性を判別できる生き物であり、「推論の妥当性の判別」とは「『前提が真で結論が偽』ということが不可能だと分かること」即ち「可能性の判別」である。ロウはこのように答えている<sup>45)</sup>。

前述の第Ⅱ節第3項「形而上学の不可欠性」や第Ⅲ節第1項「カント的形而上学への批判」で見たように、形而上学批判に対するロウの反論には、「形而上学に対する批判それ自体が実は形而上学に属している」という共通のパターンがある。例えば、「真理の唯一性を否定すること（相対主義）は自己破壊的な主張であるから維持できない」という形而上学的論証によって真理の唯一性が擁護される。そして、逆に「真理の唯一性」によって形而上学の不可欠性が擁護される。「これは悪循環でも論点先取でもない」とロウは言い、「形而上学はその根拠をそれ自身の中に含んでいる」と言う<sup>46)</sup>。これはどういう意味か。「『問うことそれ自体が、問いへの答えになっている』という構造がここにはある」という意味であると思われる。人間という合理的存在者は問うことができる。そして、「問うことができる」ということが、「可能的領域に関する知識が可能である」即ち「形而上学的知識が可能である」ということを示している。ロウはこのように言いたいのであろう。

しかし、可能性に関する形而上学的知識は、具体的にはどのような方法によって獲得できるのだろうか。ロウが提示するのは、「概念について考察する」という方法である。例えば、第Ⅳ節第2項「形而

<sup>43)</sup> [Kripke 1972].

<sup>44)</sup> ただし、第Ⅱ節第2項「科学主義（クワイン）への批判」で述べた「文Aが矛盾律からの帰結である」という命題Xは、あらゆる可能世界で真だから形而上学的に必然であるが、アプリオリに知ることができる。

<sup>45)</sup> [Lowe 2002, pp. 11-12].

<sup>46)</sup> [Lowe 2002, p. 5].

上学的可能性」で述べた「物の分裂」の可能性に関する知識は「物」や「因果」の概念について考察することによって獲得された。ロウによると、適切な概念は物の本性の正しい把握を具現化 (embody) する<sup>47)</sup>。それゆえ、可能性に関する形而上学的知識は概念 (および諸概念の間の関連) について考察することによって獲得できる。「同一性」・「持続」・「変化」・「必然性」・「可能性」・「因果」・「行為者」・「空間」・「時間」・「運動」などの概念とそれらの相互関係について考察することによって、実在の根本的構造を明らかにできるのである<sup>48)</sup>。

ただし、「概念考察によって実在の根本構造を知りうる」と主張しても、ロウが記述的形而上学や意味論的形而上学を受け入れるわけではない<sup>49)</sup>。というのは、第Ⅰ節「形而上学の復権」や第Ⅲ節第2項「記述的形而上学 (ストローソン)・意味論的形而上学 (ダメット) への批判」で見たように、ロウは「我々の概念を実在に一層適合するものに変えること」即ち「改訂的形而上学」は可能だと主張しているからである。しかし、「概念を考察する」という方法によって「概念を改訂する」ことは果たして可能なのか。

ロウによれば、形而上学的知識は可謬的 (fallible) である。形而上学的知識に絶対確実性を求めることは誤りである。形而上学的知識は将来の研究において覆される可能性を持つ<sup>50)</sup>。ロウは形而上学を中心にあるのはカテゴリー論だと言うが、形而上学の現状において、複数のカテゴリー論が競合していることを認めている。ロウ自身は「対象・モード (トロープ)・種・属性」の4つのカテゴリーを (消去や還元が不可能な) 根本的カテゴリーとして提起するが、他に「対象と属性」の2カテゴリー論や「対象とトロープ」の2カテゴリー論、さらには「トロープ」だけの1カテゴリー論などが競合している。この論争状況の中で、ロウはみずからの4カテゴリー論をどうやって正当化するのか。競合する2カテゴリー論や1カテゴリー論の場合、カテゴリーの種類が少ないから、「存在論的節約性」という点でロウの4カテゴリー論に優っている。しかし、ロウに言わせると、それらのカテゴリー論は説明力の点で劣っている。「性質の知覚」、「トロープの個別化」、「自然法則の分析」、「傾向性の分析」をすべて適切に説明できるのは自分の4カテゴリー論だけであると主張する<sup>51)</sup>。

ロウ解釈をいったん離れ、一般的に考察してみよう。一つの形而上学的主張が、競合する他の主張に対してどのように自分の優位性を正当化できるか。これはメタ形而上学に属する問いである。この問いに対し、「形而上学者にだけ備わった特殊な認識能力がある」と主張することはできないであろう。競合する形而上学者たちが互いに「自分の認識能力の方が優れている」と主張しあっても、不毛である。では、形而上学的主張は何によって正当化されるのか。

形而上学的主張は、他の学問の場合と同様に、「より良い理論を選択するための基準」によって正当

47) 「我々が世界をどのように概念化し、かつ、概念化すべきかは、世界のあり方 (それは我々の価値観や関心から独立している) によってかなり制約されている」とロウ ([Lowe 2009, p. 7]) は言う。

48) [Lowe 2002, pp. 12-14].

49) [Lowe 2002, pp. 13].

50) ロウ ([Lowe 2002, pp. 7-9]) の推測によれば、カントが、実在ではなく思考を探究対象とした動機は、カントが「思考の構造に関してなら、(実在に関しては得られないような) 絶対的で確実なアプリアリな知識が獲得可能だ」と考えたことである。

51) [Lowe 2006]. なお、[伊佐敷 2012] を参照せよ。

化されるのだと考えるべきである。即ち、「論理的整合性」、「説明の包括性」、「未定義概念の少なさ」、「論証の単純性」、「既存の知識の保存」、「他分野の学問的知識との整合性」、「常識との整合性」などの複数の基準をどれだけ満たしているかによって正当化される。

留意すべきことは、これらの複数の基準がトレードオフの関係にあるということである。例えば、未定義概念を少なくすると、論証は複雑になるであろう。他分野の学問的知識との整合性を優先すると、常識との整合性は小さくなるかもしれない。したがって、複数の基準の満たし方は一つに限られず、それゆえ、「より良い形而上学的主張」も一つに限られない。とすれば、複数の基準を一層よく満たす形而上学が将来見いだされる可能性がある。

また、「説明されるべき問題」や「他分野の学問的知識」や「常識」は時代とともに変化していくだろう。とすれば、「現時点で最良の形而上学的主張」も将来覆される可能性がある。

ロウの言う「形而上学の可謬性」は、究極的には、形而上学的主張がこのような仕方でも正当化されることに由来しているのだと考えられる。ロウは「形而上学的問いへの答え（即ち形而上学的知識）はどのような認識論的身分を主張できるのか」と問うているが<sup>52)</sup>。それは「アプリアリかつ可謬的」という認識論的身分を持つのである。

## VI ロウの形而上学観への批判

ロウはカント的形而上学とアリストテレス的形而上学を対比し、自分の形而上学はアリストテレス的な实在論的形而上学だと言う。即ち、人間の思考構造（カント）・概念構造（ストローソン）・言語構造（ダメット）ではなく、实在それ自体の構造を探究するのだと言う。つまり、ロウは「实在」と「思考（ないし概念あるいは言語）」の峻別を前提にして、自らの形而上学を「实在論的」だと形容している。

しかし、ロウが考えているように、实在と思考（ないし概念・言語）は峻別できるのであろうか。もちろん、「实在と思考は峻別できない」という前提から出発するのは独断である。しかし、逆に、「实在と思考は峻別できるはずだ」という前提を疑わないのも同じく独断であろう。この峻別が維持できるかどうかはやってみないと分からないはずである。実際に、形而上学的探究を遂行していった場合、「实在とそれを表象する思考（ないし概念・言語）」という峻別が維持できなくなるような地点、即ち、思考と存在とが絡み合ってしまうような地点に達する可能性はないだろうか。形而上学的探究が「思考の限界」「言語の限界」と呼べるような地点に達する可能性はないだろうか<sup>53)</sup>。

ロウが「实在論的形而上学」と「反实在論的形而上学」を峻別するとき、そこには思考や言語に対する楽観的な信頼が見え隠れしている。もちろん、思考や言語の限界に達した場合、そこでどのように探究を遂行するかは極めて困難な課題である。しかし、このようなメタ形而上学的問題が存在することは確かであろう。

<sup>52)</sup> [Lowe 1998, p. 2].

<sup>53)</sup> この点については [伊佐敷 2016] を参照せよ。

※本研究は科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究，課題番号 25580004「分析哲学における存在論の復権に関する思想史的研究」）による成果である。

## 文献表

- Aristotelēs, *Categoriae*. (邦訳：アリストテレス「カテゴリー論」中畑正志訳、『新版 アリストテレス全集 1』岩波書店，2013 年；「カテゴリー論」山本光雄訳、『アリストテレス全集 1』岩波書店，1971 年.)
- Aristotelēs, *Physica*. (邦訳：アリストテレス「自然学」出隆・岩崎允胤訳、『アリストテレス全集 3』岩波書店，1968 年.)
- Ayer, Alfred Jules (1936) *Language, Truth, and Logic*, 2nd ed., 1946, Penguin Books, 1971. (邦訳：A. J. エイヤー『言語・真理・論理』吉田夏彦訳，岩波書店，1955 年.)
- Carnap, Rudolf (1932) “Überwindung der Metaphysik durch logische Analyse der Sprache,” *Erkenntnis*, Band 2, S. 219-241; translated by Arthur Pap “The Elimination of Metaphysics through Logical Analysis of Language,” in *Logical Positivism*, edited by A. J. Ayer, The Free Press, 1959, pp. 60-81, ch. 3. (邦訳：ルドルフ・カルナップ「言語の論理的分析による形而上学の克服」内田種臣訳、『カルナップ哲学論集』永井茂男・内田種臣編，紀伊國屋書店，1977 年，pp. 9-33.)
- Dummett, Michael (1991) *The Logical Basis of Metaphysics*, Duckworth.
- 伊佐敷隆弘 (2012) 「ロウの 4 カテゴリー存在論 (1)」宮崎大学教育文化学部『紀要 人文科学』第 27 号，pp. 1-14.
- (2015) 「なぜ無ではなく何かが存在するのか－分析哲学における形而上学の盛衰－」日本大学経済学部『研究紀要』第 77 号，pp. 181-200.
- (2016) 「根拠と経験－井上忠の哲学を「ギリシア哲学解釈」という枠からはずす」哲学会編『根拠・言語・存在』(哲学会年報『哲学雑誌』第 131 巻第 803 号) (印刷中).
- Kant, Immanuel (1787) *Kritik der reinen Vernunft*, 2. Aufl. (邦訳：『純粋理性批判』)
- Kripke, Saul Aaron (1972) *Naming and Necessity*, Harvard University Press. (邦訳：ソール A. クリプキ『名指しと必然性：様相の形而上学と心身問題』八木沢敬・野家啓一訳，産業図書，1985 年.)
- Lowe, Edward Jonathan (1998) *The Possibility of Metaphysics: Substance, Identity, and Time*, Oxford University Press.
- (2002) *A Survey of Metaphysics*, Oxford University Press.
- (2006) *The Four-Category Ontology: A Metaphysical Foundation for Natural Science*, Oxford University Press.
- (2009) *More Kinds of Being: A Further Study of Individuation, Identity, and the Logic of Sortal Terms*, Wiley-Blackwell.
- Quine, Willard Van Orman (1951) “Two Dogmas of Empiricism,” in *From a Logical Point of View*, Harvard University Press, 1953, pp. 20-46, ch. 2. (邦訳：W. V. O. クワイン「経験主義のふたつのドグマ」飯田隆訳『論理的観点から：論理と哲学をめぐる九章』勁草書房，1992 年，pp. 31-70, 第二章.)
- (1969) “Epistemology Naturalized,” in *Ontological Relativity and Other Essays*, Columbia University Press. (邦訳：W. V. O. クワイン「自然化された認識論」伊藤春樹訳、『現代思想』1988 年 7 月号，pp. 48-63.)
- Ryle, Gilbert (1932) “Systematically Misleading Expressions,” in *Collected Papers volume 2: Collected Essays 1929-1968*, Routledge, 2009, pp. 41-65, ch. 3. (邦訳：ギルバート・ライル「系統的に誤解を招く諸表現」野家啓一訳、『現代哲学基本論文集 II』坂本百大編，勁草書房，1987 年，pp. 155-201.)
- Strawson, Peter Frederick (1959) *Individuals: An Essay in Descriptive Metaphysics*, Methuen. (邦訳：P. F. ストローソン『個体と主語』中村秀吉訳，みすず書房，1978 年.)